

うしお

第 145 号

昭和 43 年 7 月

目 次

昭和 42 年度わかめ養殖概況	養 殖 部	1
昭和 43 年度わかめ種苗培養 概況	〃	6
定 置 観 測 (6 月 分)	〃	8
6 月 の 漁 海 況	漁 業 部	9
漁 場 観 測 速 報 (6 月 分)	養 殖 部	11
奄 美 短 信	大 島 分 場	12
業 務 概 況	編 集 部	14

鹿兒島市城南町 20 番 12 号

鹿兒島県水産試験場

昭和42年度わかめ養殖概況

養 殖 部

1. 種 苗 培 養

第1表に示すように、6漁協管内14経営体が約13万mを培養した。このうち個人培養は東町の5、垂水市の3経営体で、他の6経営体は漁協又は研究グループによつて培養された。

母藻は東町葛輪産種と阿久根産種の2品種である。

游走子付けは5月15日～25日の間に実施された。游走子付けは一般に次のような要領で行なわれている。

母藻は天然産の成実葉を用い、採集後1晩蔭干ししてから、容量150ℓの塩ビ水槽に20～30分間海水と共に入れて濃厚游走子液を作る。

一方、約1～1.5トン容の水槽には海水を注加し、採苗水槽として準備しておく。濃厚游走子液は成実葉を取り出し、荒目の布で液を濾過しつゝ採苗水槽へ注加する。これに種繩を巻いた枠を垂下し、約40～60分間浸漬して採苗を終了する。採苗した種繩枠は別の1～1.5トン容の清浄な海水へ移して培養を開始する。

母藻の量は種繩100m当り4～6株である。種繩はクレモナ1号の30～36本のケバ焼きしたもので、塩ビ製の枠に100～200mを巻きつけている。

培養は換水、採光調節、施肥を行なつている。

沖出しは11月下旬～12月上旬に仮沖出し後、種苗配布し展開養殖した。

2. 養 殖 と 生 産

第1表に示すように試験養殖を含めて34漁協管内で424経営体が約124,000mの種繩を養殖した。生産量は生重量にして約295トン、金額にして約1,420万円と推定される。

これを41年度と対比すると、経営体数で約3.5倍、養殖種繩量で3.6倍、生産量で1.8倍、金額で約2.2倍となつた。

種繩1m当り平均生産量は2.3kg、114円で、41年度の4.8kg、134

円に比べ作柄が低下している。生わかめ1kg当りの単価は約48円となり、41年度の38円より高くなった。

従来は、生わかめとして出荷販売していたが、本年度は素干わかめが全体の約30%を占めた。これは生産量の増加による流通面への考慮がこのような状態をもたらしたものと考える。

なお、本年度のこの生産統計は漁協からの報告と、試験漁場分は普及員の報告資料によつたが、第1表下段に示した普及員調査資料と、農林統計資料との三者で数字的にかなりの開きがあつた。

3. 問題点

(1) 母藻の確保

本県のわかめ養殖は当初東町と鹿児島市地先で行なわれていたが、この3、8年のうちに長島地区と鹿児島湾内で急速に普及してきた。更に本年度は西薩沿岸と離島への試験養殖が行なわれ、43年度は更に拡大の傾向を示している。

これらの種苗は主として東町と鹿児島地区での培養に依存しているが、次第に自家培養の気運になりつつある。

しかし、これら種苗培養の母藻は東町と阿久根産の天然わかめの成実葉に依存しており、これら産地では資源保護の面からも成実葉の移出に反対の声がでた。

従つて、今後更に養殖の増加が見込まれるが、母藻の確保が重要となつてきた。

水試では43年度から養殖わかめの成実葉を用いて種苗培養の比較試験を開始したが、今後は完全な再生産方式にもつていくようにすべきであろう。又、成実葉の2回使用も可能性があるので再検討する。

(2) 流通対策

養殖わかめの販路は、当初は生わかめとしての早期出荷が主体であつた。事実、本県でも食品としての生わかめの需要が増加している。しかし、41年度頃から、生産増加に伴つて1～2月の出荷時期に供給過剰による価格の低下がみられ、一部地区では生産者間で出荷調整を行なつてきている。

42年度の生わかめの時期別単価は毎当り1月下旬で高値250円、2月上旬で100～200円、2月下旬で50～100円、3月になると30円の安値もみられた。

このように生わかめは現在の需要状況から推して、販路を生わかめだけで求めることは困難がある。今後益々生産増加が見込まれていることから、この流通対策は本県のわかめ養殖発展のキーポイントであると考え、現状から思いつくまゝに2、3点をあげてみると、

① 生わかめの販路拡大

養殖わかめの特徴は天然わかめより早期に生産出荷できることである。この有利性を最大限に活用することが肝要であろう。この数年来生わかめの出荷によつて消費者も次第に認識してきており、店頭を生わかめをみるようになってきた。

現在までのところ生わかめの生産は早くて1月中旬頃からで、2月が最盛期のようなのである。こゝで問題なのは価格の維持安定を計ることである。現在までのところ、魚市場、青果市場へ生産者個々が出荷しており、盛期には乱売による値くずれがおきている。この解決には系統出荷の体制を確立すべきと考える。生鮮食品であることから鮮度と時間的な問題もあるが、農協における野菜、果実の一元的出荷にならつて、系統共販の方法を検討すべきときがきていると思う。

一方、消費者への生わかめのPRも強力に推進していくことも必要であろう。

② 加工わかめによる販売体制の確立

生わかめは早期出荷として有利な販売方法であるが、現在の需要状況と、今後の生産増大からみてその供給には限界が予想される。従来わかめの消費傾向として大部分が素干わかめが利用されており、今後もこのような形で需要が大きいものと思われる。このことから、養殖わかめの後期生産は加工わかめによつて生産性の向上を計ることが望ましい。

加工わかめは板わかめ、もみわかめ、塩蔵わかめ等もあるが、消費傾向からみても又、加工法の容易な点からみても素干わかめが安全である。

素干わかめについても系統共販体制の確立が肝要で、すでに実施されて

いるのりの漁獲共販に準じた体制にもつて行くべきであろう。

(3) 種苗供給体制

本県のおかめ養殖業は昭和36年度に普及事業の一環として東町地先で開始した養殖試験から次第に普及され、41年度で3.4万 m 、42年度で12.4万 m 、と飛躍的に養殖量が増加し、43年度の培養種縄量は約29万 m となっている。

一方、43年度の県下の養殖計画数量は約25万 m (普及員会議資料)でその差約4万 m が種苗生産過剰となっている。東町ではすでに種苗販売を目的とした個人培養が増加しつつあり、このままでは放置すると種苗の需給関係がくずれるおそれがある。また、県下各地で養殖が普及すると自家培養も増加する傾向にある。

これらのことから、種苗供給体制について充分検討すべき時期に至つたと思われる。

方向としては、地域のブロック別に共同培養場を設置することが県全体から見ると合理的な方法ではないかと考える。

自家培養は技術普及の段階として、おかめの認識を深める意味でも望ましいことではあるが、省力化の叫ばれる現在集約的培養が生産費の軽減にも役立つものと思われる。

既設の個人培養の保護は必要であり、これらを含めた地域別(例えば、北薩地区、西薩地区、鹿児島湾地区)の供給体制を確立することも一方法と考える。

第1表 漁協別わかめ養殖・生産状況（漁協からの報告と、普及員の報告※印による）

漁協別	種 苗 培 養			養 殖 生 産							
	経営体数	種 羅 量 (1000m)	母 藻 産 地	経営体数	種 羅 量(m)	生 わ か め		加 工 わ か め		生重量換算 生産量(kg)	種 羅 1 m 当 り 生産量(kg)
						生産量(kg)	平均単価	生産量(乾kg)	平均単価		
東 町	6	51.0	東町	183	51,000	21,300	48	3,360	400	54,900	1.1
長 島 町				4	2,200	80	200	200	450	2,080	0.9
出 水 市	1	6.0	東町	42	6,000	800	100	2,920	500	30,000	5.0
黒 之 浜				1	1,000	703	88			703	0.7
阿 久 根 市	1	1.0	阿久根	1	1,300	388	70	85	400	1,238	0.9
西 目				6	2,700	5,924	70	150	400	7,424	2.7
川 内 市				2	600	80				80	0.1
中 甕 ※				1	200	50	116			50	0.2
浦 内 ※				2	300	140				140	0.5
鹿 島 村 ※				1	150	255	69			255	1.7
西 海 ※				1	150	0				0	0
羽 島 ※				1	800	1,200				1,200	1.5
串 木 野 市 ※				1	250	1,300				1,300	5.5
枕 崎・久 志 ※				2	150	100				100	0.7
か い え い ※				1	300	500	100			500	1.7
山 川 町				1	300	470	50	70		1,170	3.9
指 宿 市				1	800	4,800	40			4,800	6.0
喜 入 町 ※				19	1,800	10,800	50			10,800	6.0
谷 山 市	2	32.2	東町・阿久根	39	19,100	51,000	50	420		55,200	2.9
鹿 児 島 市 ※	1	30.0	東町・阿久根	4	3,000	12,000	50			12,000	4.0
東 桜 島 ※					7,000	28,000	50			28,000	4.0
西 桜 島 ※				30	5,800	11,600	75			11,600	2.0
加 治 木 町				12	1,200	3,000	90	240	850	5,400	4.5
国 分 市						1,000	50			1,000	
福 山 町				15	1,850			270		2,700	1.4
垂 水 市	3	10.0	阿久根	19	10,000	30,000	60	1,500	400	45,000	4.5
鹿 屋 市				15	1,500	3,435	70			3,435	2.3
大 根 占				1	1,000	3,000	60			3,000	3.0
根 占 ※				11	2,900	8,700	60			8,700	3.0
内 之 浦 町 ※				1	100	40				40	0.4
船 間 ※				1	100	450				450	4.5
志 布 志 町 ※				2	480	1,000	58	50		1,500	3.1
熊 毛 地 区 ※				3	150	75				75	0.5
大 島 地 区 ※				1	150	0				0	0
合 計	14	130.2		424	124,330	202,190		9,265		294,340	1.45
普及員調査資料				407	128,600					492,440	3.82
農 林 統 計				351	86,800					124,975	1.44

昭和43年度わかめ種苗培養概況

養 殖 部

鹿児島県下のわかめ養殖は、こゝ1、2年に県下各地に急速に普及し、種繩量で見ると昭和41年度3.4万m、42年度13万mとなり、本年度は第1表に示すように10漁協管内で23経営体が294,600mを培養している。

このうち個人培養は東町の7、谷山の4、加治木の1、垂水市の3、合計15経営体で他の8経営体は漁協又はグループ培養である。

本年度新規に培養を開始したのは、西目、かいいい、加治木、鹿屋、志布志の5漁協管内と、東町の個人培養の2経営体が増加した。

採苗は母藻別にみると、東町産種が186000m(63%)、阿久根産種が10万m(34%)と天然産成実葉が97%を占めている。本年度からはじめて谷山、鹿児島県の二培養場で養殖わかめを母藻として試験的培養をはじめた。

游走子付けは母藻採取の関係から各地ともほぼ同じ時期に行なわれ、東町産母藻では5月20日～24日、阿久根産母藻で5月17日～19日に実施された。

培養水槽は種苗生産技術の普及浸透した北薩地区と、谷山地区でコンクリートの1～1.5トン容の水槽で、その他の地区は培養場の都合、試験的培養等のため、塩ビ製0.2～1.0トン容の水槽を使用している。

水槽容積1トン当りの種繩培養量は2,000～7,000mと差がみられ、平均すると約4,000m程度のものである。

本年度の種苗生産について注目したいことは、養殖わかめを母藻とした種繩の生産性が、天然産のそれとどうなるかを充分検討すべきであろう。

第1表 昭和43年度わかめ種苗培養状況

漁協別	経営 体数	母藻産地別種縄量(1000m)				游走子付け 月/日	培養水槽			水槽1トン 当りの種縄 培養数 (1000m)	備考
		東町産	阿久根産	地元 養殖産	計		材 質	数 量	総容積		
出水市	1	7.8			7.8	5/20	コンクリート	1	3.4	2.3	グループ培養
東 町	8	145.0			145.0	5/20~23	コンクリート			3~4.0	漁協 1 個人 7
西 目	1	5.0	33.5		38.5	5/17~21	コンクリート	4	9.6	4.0	グループ
かいえい	1		1.0		1.0						漁協
谷 山	5	22.9	21.3	4.7	48.9	5/14~24	コンクリート ガ塩ラ スビ	8 16 3	11.2	4~6.0	グループ 1 個人 4
鹿児島市	1	5.0	25.4	3.1	33.5	5/17~24	木製 塩ビ	2 4	5.9	5.7	漁協
加治木町	1		0.7		0.7	5/17	木製	1			個人
垂水市	3		7.0		7.0	5/17	塩ビ	7	1.0	7.0	個人
鹿屋市	1		11.0		11.0	5/17	塩ビ	2	2.0	5.5	漁協
志布志町	1		0.8	0.4	1.2	5/17	塩ビ	2	0.2	6.0	グループ
計	23	185.7	100.7	8.2	294.6						

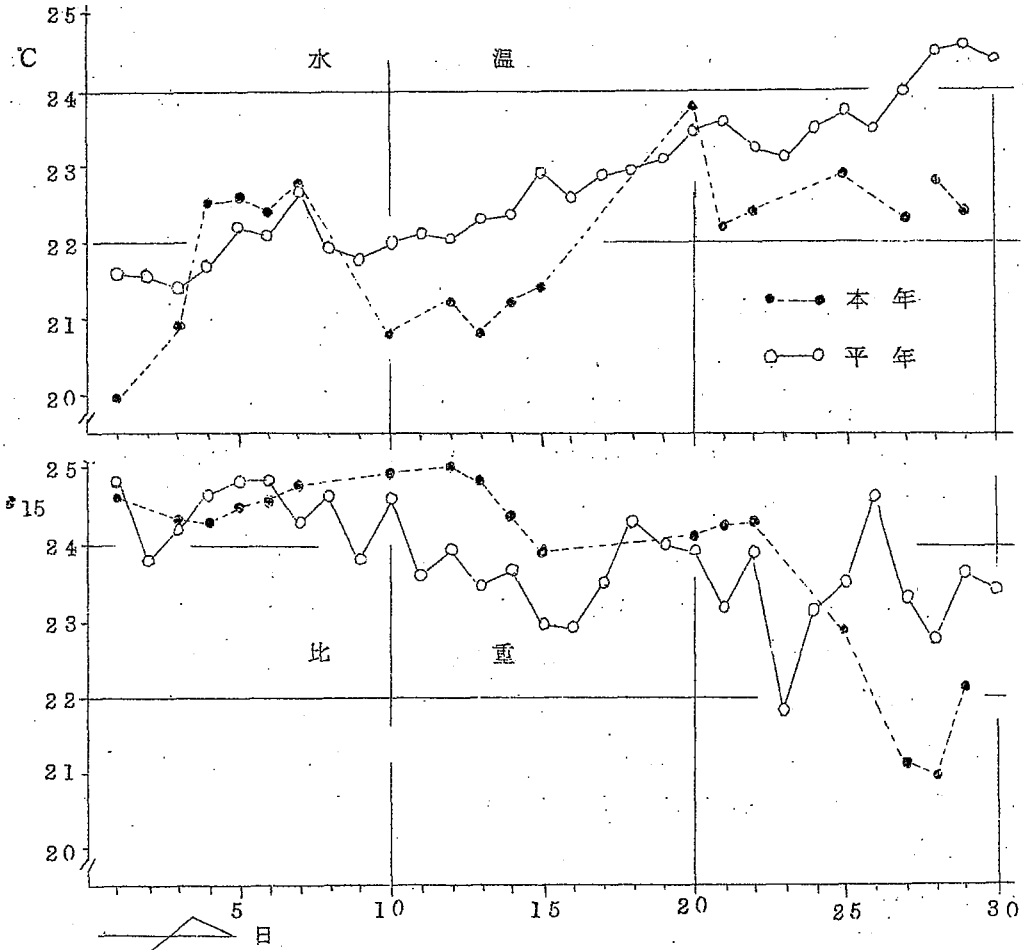
定 置 観 測 (6 月 分)

養 殖 部

○ 旬平均水温・比重 (満潮時・表面)

旬	水 温 °C				比 重			
	本 年	前旬差	前年同期差	平年差	本 年	前旬差	前年同期差	平年差
上	21.70	+1.77	-3.58	-0.17	24.58	-0.08	-0.08	+0.12
中	21.68	-0.02	-3.04	-0.98	24.46	-0.12	-0.84	+0.81
下	22.50	+0.82	-1.61	-1.30	22.59	-1.87	-2.42	-0.72
月平均	21.96	+2.69	-2.68	-0.81	23.88	-0.57	-1.08	+0.07

6 月 の 水 温 ・ 比 重



海 況

薩南沿岸の表面水温は5月に比べて屋久島西側で若干(0.5℃)低くなつたほか、各海域とも0.5～2.0℃程度上昇しており、大隅海峡で21℃台、甌海峡では19～20℃台となつている。しかしこれを平年に比べると大隅海峡では2～3℃、甌海峡では1.5℃、枕崎～開聞沿岸で1.5℃とそれぞれ低目になつている。又、中、下層でも同様な傾向が認められており依然として低水温が続いている。

なお、草垣島北東10哩附近では20℃台の冷水域が認められている。

黒潮本流は、中旬の観測で屋久島南15哩附近に達しており、本流域では1.7～1.8哩東流、屋久島、種子島中間域では1.5哩の南流がある。下旬では種子島東40～50哩に2哩前後の北流が、都井岬南東30哩附近から沿岸寄りでは北東から北に向う流れがある。

漁 況

旋網漁業は依然として低調である。

薩南漁場を昨年同期に比べると、サバは極端に減少しており、今のところ回復の兆は全くないが、八田網によるサバ仔の漁獲は例年より多く、カツオ群の餌持ち状況をみると、多くはサバ仔であるところから、秋漁期には若干期待がもてるのではなからうか？

アジ、ムロアジ類ともに約5倍に増加している。種子島から長島方面の北陸漁場はアジ、サバ類の増減は大きくないが、カタクチの減少が目立っている。

中、小型船によるカツオ一本釣は前月に比べ入港船、漁獲量、1隻1航海当り漁獲量など大巾に減少した。(枕崎、山川港の水揚量5月270隻で約3,900屯、1隻当り14.5屯、6月220隻で約2,500屯、1隻当り11.4屯)

又、昨年との6月に比べてみても減少している。

キビナゴ漁は各地とも好漁である。(降雨量の多い年はキビナゴの好漁年といわれているが)

業種別・漁港別水揚状況（48年6月）

（単位 吨）

業種	漁港	入港隻数	漁獲量 (吨)	マアジ	サバ	ムロアジ	ウルメ	カタクチ	マイワシ	ブリ	他	42年6月		
												隻	吨	
近海 旋網	阿久根	大	27	114.9	16.3	21.0	13.6		1.6	0.2	17.1	45.1	40	237.7
		中	123	345.4	166.1	28.4	0		18.6			132.3	85	283.0
		小	283	448.6	159.2	25.8	—		231.6			32.0	291	433.8
	枕崎	74	906.7	906.7	181.8	570.1	2.9			5.5		68.3	104	1,491.6
	串木野	30	145.3	80.7	30.9	28.9						5.2	56	413.2
	内之浦	小	7	5.2	0.1	0		1.4	3.5			0.1	—	—
	計	544	1,966.3	500.6	287.8	612.6	4.3	255.3	5.7	17.1	283.0			
八田網	山川	6	3.0					2.9			0.1	4	1.0	
	枕崎	43	208.6	59.7	132.2	0.3	0.3				16.1	9	11.9	
棒受網	阿久根	193	130.2	41.1	24.8		0.1	56.3			7.9	57	25.8	
	内之浦	2	0.1				0	0.1				—	—	
釣サバ	阿久根	16	21.9	1.6	19.9	0.2					0.2	16	3.0	
カツオ 一本釣	山川	大	—	—								—	—	
		小	111	1,214.5									107	1,270.4
	枕崎	大	1	32.4									—	—
		小	109	1,294.6									136	1,668.4
刺網	阿久根	544	144.5									373	57.3	
	山川	51	11.3									—	—	

漁 場 観 測 速 報 (6 月 分)

養 殖 部

- 浦内の6月水温は、最高水温の平均が22.49℃、最低水温の平均が21.23℃。月間の最高水温は下旬の25.0℃、最低水温は上旬の19.5℃。前月よりも2℃以上の上昇を示している。昨年同期の里の水温に比較すると、昨年よりも0.3～1.3℃低目を示している。
- 水成川の水温は、最高水温の平均が20.85℃、最低水温の平均が19.96℃。月間の最高水温は下旬の22.1℃、最低水温は中旬の19.2℃であつた。前月よりも0.2～1.3℃高くなつている。昨年同期に比して約3℃低く、特異的な水温を示している。
- 福山の水温は、最高水温の平均が23.85℃、最低水温の平均が20.16℃。月間の最高水温は下旬の24.5℃、最低水温は上旬の19.2℃。前月よりも2～3℃高くなつており、他地区に比して上昇傾度が大である。昨年同期に比較すると1.8～2.6℃低くなつている。
- 全般的には最高、最低水温ともに各地区別に水温のひらきがあり、それぞれの地区の特性を示している。また、全般的に昨年よりも低目を示し、特に水成川では昨年よりも3℃低くなつている。

長崎海洋気象台6月下旬発表の西日本海況旬報によると、平年に比べて幾分低目のところが多く、黒潮域および九州沿岸海域では1℃ぐらい低目となつている。今後海面水温は梅雨前線による降雨の影響でしばらくはやゝ低目の状態が続く見込みである。なお、九州沿岸海域では二重潮の発生するおそれがあるから注意するように報じている。

旬別観測値	浦 内		水 成 川		福 山	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上	22.80	20.62	20.86	19.88	23.27	20.03
中	23.05	22.05	20.62	19.65	23.87	20.70
下	23.90	23.10	21.05	20.07	24.41	21.00
月平均	22.49	21.23	20.85	19.96	23.85	20.16
前月差	+2.02	+2.73	+0.20	+1.34	+3.29	+1.88
前年差	-1.28	-0.27	-2.87	-3.05	-1.80	-2.57

地球上に一体どのぐらいの動物が生息しているかという、その種類だけでもざつと100万種と言われておりますけれど日々その面での研究が進むにつれて昆虫などは、アフリカのジャングルやあちこちから、毎年数千にのぼる新種が発見されていると聞きますので、現在その種類数、個体数のいずれも圧倒的に多数を占める50万種の昆虫もその実まだ何10万いるかちよつと想像しきれない感じもして来ます。

学生時代蝶を追いまわして野山にキャンプまでし、家中蝶と蛾の標本をピンナップしたので気狂い扱いされたものですが、昆虫の生活についての徹底的な研究は、伝染病対策、林業、そして切つても切れない食料源の農業にとつてどれほど大切なものかは多言を要さぬところです。一夫多妻の習性を持つ害虫の雄のみを大量に飼育し、これに放射能を照射してから山野に放ち、その子孫に次々と生殖能力を失わせて駆除する方法とか、虫をもつて虫を制する天敵対策なども、もつともつと研究成果の期待されている分野でありましょう。私の学生時代などは単なる標本のコレクションに終つてしまつたのですが、それでも「名を知るはそのものを知るはじめなり」などと言つて後に引かなかつたものでした。

奄美大島の果樹栽培の大障害であるミカンコミバエ、野菜を食い尽すナメクジとアフリカマイマイの群、また群、つい一週間程前のことですが、古仁屋の対岸である加計呂麻島にいる私の友人は、自転車に乗つて小路を走つていてハブに出つ喰わしたのですが、あいにくと彼は左手に大ヤカンを下げていたので急ブレーキが効かず、そのハブの手前で自らヒツクリ返つてヤカンのお茶をぜんぶぶちまけてしまつたものでした。もつともこのハブはそれより先にそこを通つた子供が既に棒でたゞきのめしていたので、シリモチをつき乍らの大笑いで済んだのですが、それにつけてもこれらの研究、対策の必要性が痛感されたひとこまでもあります。

さて、ことほどさ様に大切ならば、自らこれに打ち込むかというところでもなく、自分がしていることはゼイタク品の研究であります。

真珠業界の動揺がしきりと言われております。しかし数千年の歴史を持つ真珠

の美しさが、その本質が変る筈はなく、美を求める人の心は永遠に続くのであつて、自分はその美を生み出す道で努力をしてみたい。

ところが、そうは申し乍ら、夏ともなると朝出勤時から30℃を越す暑さのせいも加わつてマナコはモウロウとし、心に決めたことも8回決心して8回忘れ、9回目の決心でやつと進みはじめるほどスローテンポな自分に腹が立つのですが、去る年、東太の医学部で測定してもらつたところによると、脳味噌の重量だけはアインシュタインや湯川博士、その他世界の最優秀頭脳でその重量も抜群と言われた数10人の秀才歴々の中程にランクされるもので、大層希望に燃えたこともありました。もつとも、そのカルテの備考欄には優秀な頭脳は一般にやゝ大きい、大きい頭脳必ずしも優秀ならず、とか書いてありましてこれまた落胆。いずれにしても、普通100億個以上と言われる人間の脳細胞は多くの経験、学習を経た後は、現在の如何なる電子計算機も及ばぬものを持つていますから、やはり努力が必要となります。

その100億個の脳細胞のうちの幾つかを覚えているものに、かつて真珠貝を求めてアクアラングを携えめぐりめぐつた南海のサンゴ礁の^{美しい}島々があります。奄美大島にはその夢の様な南海の島々の面影を彷彿とさせるものが色々あります。ブーゲンビリアやハイビスカス、ストレツチア等の情熱的な赤い花、クロトンの葉の実に面白い色と形。海に潜ると、チョウチョウウオ科だけでも40数種を数える色形様々の熱帯魚、山あり、谷ありの海底にびつしり並んだテーブルサンゴ等々……。

この春皇太子御夫妻を御案内申し上げたグラスボートは、潜水出来ぬ人々をてつとり早く案内出来る点では結構なもので、都会から来た人々は、「奄美の海が、海の中がこんなにも色彩豊かで、変化に富んだものとは知らなかつた」とその美しさに心をうたれています。その海に潜れば、そこに展開される海の生き物たちの様々な生活ぶりはまたことさらに興味も多く、その神秘的な世界はグラスボートではのぞくすべもないものです。この神秘さと美しさをたゞえた海で、世界で最も美しい真珠を、マベ真珠を育てたい。その第一歩の人工採苗にとり組んだことは私の大なる喜びであり、また反面まだまだ努力も至らぬものであることも痛感しておりますので先輩諸兄の御指導、御鞭達を今後ともお願い申し上げます。

(M . M)

§ 本 場

漁 業 部

○ か も め

* 7月3日～6日 定線魚群調査

表面水温は鹿児島湾中央部で24℃台，湾口附近で23℃台で6月より2℃高目となっている。

大隅海峡では23℃台で昨年並であるが，平年に比べると2℃前後低い。魚群は湾中央部に小群が，又開聞～枕崎近海でも小群が認められたが，これは釣によれば19～23cmの小サバであつた。

* 7月15日～ 貝，エビ分布調査（枕崎沖合）

○ 7月13日～18日 タイゴチ網調査（福岡市）

西ノ浦地区（二そう曳），姪ノ浜地区（一そう曳）に乗船し，操業方法，漁具その他について調査した。結果は鹿児島業者の参考に供する。

養 殖 部

○ ノリ糸状体培養（月間）

○ ワカメの養殖芽株による採苗，培養試験（月間）

○ 7月18～19日 九州・山口ワカメ分科会（於 宮崎）

○ 7月11日 西桜島

パールコート，パロンAの殻面塗付によるアコヤのフジツボ防除対策。

○ 7月1～3日，9～10日，16～17日

クルマエビ放流実践漁場の追跡調査

○ トコブシ，アワビ餌料種別飼育試験

前月に引き続きハバノリ，アオサ，ホンダワラ，コンブのそれぞれ餌料種別に大崎鼻で垂下飼育中。

トコブシは外観的に生殖巣の着色発達してきたものが認められるようになった。

○ 真珠養殖漁場調査

7日毎に鹿児島湾内大崎鼻地先の漁場観測をなす。6月下旬以降プランクトンが異状増殖。

○ フジツボ，ポリドラ幼生計数

大崎鼻地先において7日毎に採集したプランクトン資料からフジツボ，ポリドラ幼生を計数。フジツボが大量的に発生している。

○ アコヤガイ採集調査

浦内湾，片浦湾，伊唐湾について前月に引続き委託実施中。

7月18日，片浦湾内20定点で幼生分布調査をなす。

製 造 部

○ 第5回指定工場主協議会開催

43年6月26日県水産センターにおいて，これからの水産加工を中心とする研究検討会を開催し，本会が本県水産加工振興の推進母体的役割を果たすため積極的な組織強化策が討議された。

参集者 指定工場主14名 講師6名 県関係7名
その他商社3名 計30名

○ 煉製品原料としてのオナガサメの凍結貯蔵試験(継続)

○ その他

* 北薩地区指定工場巡回指導(串木野，川内，阿久根)

* かつお節ばい乾工程実態調査(枕崎)

* 当月の技術相談来訪者 20件 26名

調 査 部

○ クルマエビ餌料試験

6月中各種バインダーの性状調査実施中のところ7月1日から対照区を含めて，15区分の試作餌料により試験を開始。

○ 定期漁場調査 7月2～4日，18日

垂水市海潟，牛根ハマチ蓄養場の水質，底質及び細菌調査。

○ 養成ハマチの寄生虫調査 7月18，19日

垂水市海潟地区の養成ハマチに寄生虫が見られるのでその状況調査を兼ね。

防除対策指導を実施。

○ 汚水対策

県漁政課主催，昭和43年度てんぷん汚水対策協議会で本年度当场試験調査実施計画決定。

§ 大島分場

庶務係

- 6月11日鴻の巣東大水産学部助教授，税所庭大水産学部助教授，毒ガニ調査のことで来場。

漁業係

- 芝，管鈍，花天，大浜漁場調査（底待網適地調査）
○ 海洋観測
○ 5月末 探礁丸上架

養殖係

- chaetoceros simpler を対象に培養テスト（5～6月）
○ マベ稚貝，成貝養殖管理（月間）モズク観察
○ 実験室，採苗タンク室内改造
○ 6月1日 昭和42年度マベ室内採苗稚貝90,00ヶ売渡し

製造係

- 5月末ウニ加工指導（請島）
○ 6月初旬ウニ加工試験（請島）